

格助詞「が、で、を、に」の動的付与過程モデル

A Model for Dynamic Allocation of Case Particles *ga, de, wo, and ni*

加藤 弘*・佐藤 滋**

Hiromu Kato and Shigeru Sato

東北大学*留学生センター・**大学院国際文化研究科

Tohoku University, Sendai, 980-77 Japan

E-mail: {kato, sato}@intcul.tohoku.ac.jp

Abstract: What sort of event cognition is involved in expressing grammatical relations between the predicate and the nouns followed by case particles *ga, de, wo, and ni*? Our assumption is that the particles bear their respective functions to represent the roles imposed on the semantic objects participating in an event, and that their particular allocation explains the subtle difference in a pair of sentences like *sake de gurasu wo mitasu* and *sake wo gurasu ni mitasu*, 'to fill the glass with wine.' The particle alteration phenomena imply the difference in the speaker's cognition of the event reflected in semantically equivalent or nearly equivalent expressions. In an attempt to clarify this difference, we propose a model that dynamically allocates the particles to suitable objects.

1. はじめに

話者が自分の心の中や外界を見る場合、そこには人やものとそれらの状態、時間と空間が認識される。これらの諸要素をここでは事物と総称する。事物が相互にかかわり合うことによって生起する事態を事物間の因果関係として捉え、それを述語によって言語表現で記述する過程がある(Croft 1991; Talmy 1976, 1985; 山梨 1994)。各事物が事態の中で担う役割は、このような過程の中で設定されるが、その初期設定値を深層格と呼んでいる(Nilsen 1972)。

日本語文の意味を因果性の観点から観察すると、格助詞はそれぞれプロトタイプの意味役割から逸脱した用例を多数持っている。格助詞「が、で、を、に」はそれが付与される名詞と述語間の文法関係をどのような状況認知に基づいて表現しているのだろうか。事態に関与する事物をそれぞれの助詞が、異なった観点から機能分担的に格標示することによって、「酒でグラスを満たす／酒をグラスに満たす」や「雨で濡れる／雨に濡れる」のような類似的な事態を表している。このような助詞交替現象の背後には、同一の事態を別の観点から描き、その差異を格助詞に担わせて表層構造に転換する過程が働いていると考えられるが、本稿ではこれらの助詞が選択的に付与されるモデルを考察する。

2. 因果空間と格助詞付与モデル

因果空間: 事物間の関係を原因と結果として記述する述語を含む命題、例えば、

(1) 父が車で客を駅に送る

を事物間の因果関係から見ると、(1)は「この事態を生起せしめる事物、すなわち動作主「父」が、動作主の繰る媒体「車」を介して動作の対象である「客」を選び、これを動作の結果としての「客」と「駅」との合体として達成する」、ことを表しており、格助詞「が、で、を、に」がこの順序でこの事態の因果関係を支えている。この例の場合、「送る」が物理的な因果の連鎖を記述する。さらに所有関係や時空間上の位置および移動関係を表す述語もあり、言語認知系はこれらをも因果関係に投影して把握することを可能にしている(Croft 1991; Talmy 1976, 1985)。これに基づいて文献(Croft 1991)は、始点を動作主(主格)にして、媒体(具格)、被動作主(対格)、結果(与格)とする格関係記述のための因果連鎖モデルを提案している。本稿では、話者の認知世界から切り取られた事物が取り込まれ、述語と組み合わせられ、深層格付与が行われる空間を因果空間と呼ぶ。図1にその模式図を示す。そこでは深層格標識としての格助詞が設定されたあと、適用化、受動化といった統語操作を受けて表層に至るまでに動的に格助詞付与が行われる。この過程を明らかにすることで、

同一あるいは類似の意味を持つ文の間の格交替現象を説明することができる。これらの操作は事物間の因果関係を保存しながら、事態に対する認知的観点をを変える働きをするものと思われる。

深層格の設定：深層格として格文法 (Nilsen 1972) では動作主格、直接目的格、道具格、経験者格を設定しており、これらはそれぞれ、伝統的な主格、対格、具格、与格に対応している。主格と対格以外を斜格と呼ぶ。同時に、格助詞「が、で、を、に」の意味的プロトタイプは、それぞれ主格、具格、対格、与格の格役割に対応し、図1のスロットN, I, A, Dはそれを示している。O₁, ..., O₄は事物を表す。矢印はその方向に因果関係が流れることを示す。4つのスロットには左から次のような認知特性を持った事物が入る：動作を起こし事態を生起せしめる(主格)、動作主の行為を動作の対象へ受け継ぐ(具格)、動作の作用をこうむる(対格)、動作の結果により生じる(与格)。因果の流れから、対格より右の格を後続斜格、左の格を先行斜格と呼ぶ。事物はこれらのスロットを次に述べるような操作を受けて移動する。

適用化：適用化とは、一般には動詞に接辞を付けることによって、その動詞の結合価を増やす操作である (Shibatani 1995)。たとえば、ドイツ語動詞の非分離前綴り be-は語幹に付くことによって前置詞格に置かれていた名詞を対格にする働きをする (成田 1994)。日本語には動詞に付着するこのような有形の形態素はないが、

(2) a. 山に登る／山を登る

b. 親に頼る／親を頼る

のように斜格を対格に移す操作がある。この例のほかにも因果空間で、対格・与格の名詞列を左に1スロット移動し、具格・対格となる例として、

(3) 酒をグラスに満たす／酒でグラスを満たす

がある。このように後続斜格を因果空間上で主格側に引き寄せる操作を適用化と呼ぶ。このような操作が認知的にどのような微細な差異を生み出すのかすべて分かっているわけではないが、対格に置かれた事物は斜格に置かれたものより高い関心が向けられている (成田 1994) ことは上の例文にも見ることができる。

直接受動化：直接受動化は、対格/与格の事物を主格の位置に置き、主格の事物を与格に移す操作である。日本語では明示的な受動形態素「られ」を伴わないもので、因果関係上受動である動詞、例えば「教わる、授かる」など、多数が語彙化されており、これらはそれぞれ「教える、授ける」の受動形と見ることができる。直接受動化は、図1の因果空間で対格または与格スロットの事物を主格のものと交換する操作である。「雨で濡れる／雨に濡れる」のような類似表現もそれぞれ別の能動文が受動化されたものと考えることができる。

3. 格助詞の交替的付与

因果空間では、入ってきた事物に対して因果関係に基づいて格助詞を付与するが、このとき設定される深層格配置を伴う文を初期文と呼ぶことにする。表層の文では、初期文がそのまま現れることもあるし、適用化、直接受動化、間接受動化、使役化、受益化などの操作を受け、プロトタイプのな格解釈では説明できない格配置が現れる場合もある。日本語では因果関係を直接反映した初期文は意味的または統語的に異常になる場合がしばしばあり、これが格助詞の機能を系統的に解明する上での問題点となっている。以下では、初期文が適用化と直接受動化を経る際の格交替現象を格助詞の動的付与過程と捉えている。

適用構造の生成：図2と図3は適用化によって後続斜格の事物を対格へ引き上げた例である。各例とも上段が初期文、下段が適用文である。図2は後続斜格にある事物のみをもつ初期文が適用化されているものを示しているのに対して、図3は初期文では後続斜格にある事物が対格に来るために、元来対格にあった事物が消える例である。ただし図2(e)では初期文の適用化が慣用的にできない例を示す。さらに、図4は結合価を複数持つ動詞で、後続斜格の事物が対格に上げられ

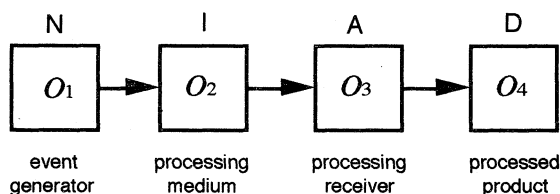


図1. 因果空間モデル

(a)	親を	親に	頼る
(b)	山を	山に	登る
(c)	大空を	大空に	舞う
(d)	手すりを	手すりに	掴まる
(e)	*政府案を	政府案に	反対する

図2. 結合価1の述語の適用化

るために元来の対格の事物が先行斜格に移される例である。これらの各例での初期文と適用文を比較すると、いわば認知的な視点の相違が反映されていると考えていいのではないだろうか。ただし、(g)は結合価を3つ持つ「煮る」が適用化によって、後続斜格の「おでん」を対格に持ってきたために、元来の先行斜格名詞「醤油」が因果連鎖の系列から押し出された例を示している。(h)は適用化しようとする、別の動詞が必要となる例で、(i)は「かぶる」にとって規定値で、後続斜格では空にしておいた「頭」を対格に持っていくとそれがあらわれる例である。(h)、(i)は適用化に伴って、「かける」が「おおう」に、「かぶる」が「おおう」に変更しなければならない。対格にくる事物にはいわば認知の焦点があたるが、適用化の意味的な役割はこの焦点の変更にあると思われる。(h)、(i)のような述語が変わる例からこの可能性が示唆される。このように適用化は因果空間上で主格以外の事物を左向きに移動する役割を果たす。

直接受動構造の生成：直接受動化とは因果空間の作用のままを格関係に表現する初期文を、被動作主に意味的な焦点を当てる目的で対格/与格の事物を主格に移動することである。日本語では明示的な受動化標識「られ」を使わない場合でも、直接受動化では語彙的に必ず述語を変える。図5は対格の事物が主格に移動する例である。これに対して図6では対格と与格の両方からの移動である。図中「(Xが)」は自然の力や不可抗力を示すことにする。図7では「で／に」による

(4) a. 胃病で苦しむ／胃病に苦しむ

b. 雨で濡れる／雨に濡れる

のような異なった表現がそれぞれ異なった初期文から派生することを示している。同様に、

(5) a. 教室で会議がある／教室に机がある

における「で／に」の使用はそれぞれ状況の位置と個体の位置を示す標識と説明される(中右 1995)が、因果空間では図8の例の初期文のような因果関係が成立すると考えられる。

このように直接受動化は因果空間上で主格の事物を斜格に移し、対格または後続斜格の事物を主格に移す役割を果たし、その基本的な認知的視点は、話者が意味的な焦点を当てたい事物を主格に置くところにあるが、動作主の行為が関知しにくい事態の認知では初期文は非文となるか、実際の場面ではほとんど用いられない文である。

4. おわりに

因果空間での事物間の因果関係を想定することによって、一見恣意的に見える格助詞「が、で、を、に」の付与が統一的になされることを報告した。初期文に対する操作として、適用化と直接受動化のほかに使役化、間接受動化、受益化などがある。適用操作と直接受動操作は格助詞の再付与に関わりながらも因果関係を保存することが分かった。使役操作、間接受動操作は因果連鎖に対してどのような影響を変えるのか、また、これらの操作の認知的意味はなにか、などの問題を今後の課題とする。

謝辞 本研究は文部省科学研究費(No.06232211)による研究成果の一部である。助詞資料表作成に協力いただいた東北大学院生中村恵氏および助詞用法のアンケートに回答いただいた東北大学1994年度前期「日本語特論」受講生の諸氏に厚く感謝する。

(a)	実状を 手紙を	手紙に	書く 書く
(b)	風景を 写真を	写真に	撮る 撮る
(c)	英語を 学生を	学生に	教える 教える
(d)	穴を 地面を	地面に	掘る 掘る
(e)	研究成果を 論文を	論文に	まとめる まとめる
(f)	大根を おでんを	おでんに	煮る 煮る
(g)	鯛を 刺身を	刺身に	作る 作る
(h)	毛糸を 手袋を	手袋に	編む 編む

図3. 結合価2の述語の適用化(1)

(a)	就職で	就職を 親戚を	親戚に	頼る 頼る
(b)	絵で	絵を 壁を	壁に	飾る 飾る
(c)	ペンキで	ペンキを 壁を	壁に	塗る 塗る
(d)	ワインで	ワインを グラスを	グラスに	満たす 満たす
(e)	答で	答を 空欄を	空欄に	埋める 埋める
(f)	七夕で	七夕を 写真を	写真に	撮る 撮る
(g)	醤油で 大根で	大根を おでんを	おでんに	煮る 煮る
(h)	シーツで	シーツを ベッドを	ベッドに	かける おおう
(i)	帽子で	帽子を 頭を	(頭に)	かぶる おおう

図4. 結合価2の述語の適用化(2)

(a)	先生が	数学を	生徒に	教える
	生徒が	数学を	先生に	教わる
<hr/>				
(b)	太郎が	ケーキを	花子に	あげる
	花子が	ケーキを	太郎に	もらう
<hr/>				
(c)	資産家が	お金を	銀行に	預ける
	銀行が	お金を	資産家に	預かる

図5. 主格／対格交替の受動化

(a)	(Xが)	車を	太郎に	ぶつける
	車が		太郎に	ぶつかる
	太郎が		車に	ぶつかる
<hr/>				
(b)	(Xが)	ボールを	頭に	当てる
	ボールが		頭に	当たる
	(頭が)		ボールに	当たる

図6. 主格／対格・与格交替の受動化

(a)	胃病が	私を	苦しめる
	私が	胃病に	苦しむ
<hr/>			
(b)	(Xが)	胃病で	私を 苦しめる
	私が	胃病で	苦しむ
<hr/>			
(c)	雨が	服を	濡らす
	服が	雨に	濡れる
<hr/>			
(d)	(Xが)	雨で	服を 濡らす
	服が	雨で	濡れる
<hr/>			
(e)	風が	草木を	揺らす
	草木が	風に	揺れる
<hr/>			
(f)	(Xが)	風で	草木を 揺らす
	草木が	風で	揺れる

図7. 初期文の受動化による「に／で」の対比(1)

(a)	(Xが)	教室で	会議を	する
	会議が	教室で		ある
<hr/>				
(b)	(Xが)	交差点で	事故を	起こす
	事故が	交差点で		ある
<hr/>				
(c)	(Xが)	机を	教室に	置く
	机が		教室に	ある
<hr/>				
(d)	(Xが)	彼を	医者に	する
	彼が		医者に	なる

図8. 初期文の受動化による「に／で」の対比(2)

参考文献

- Croft, W. (1991). *Syntactic categories and grammatical relations*. University of Chicago Press, Chicago.
- 中右実 (1995). "「に」と「で」の棲み分け-日英語の空間認識の型(1)-." *英語青年*, 140 (10), 520-522.
- 成田節 (1994). "ドイツ語動詞の結合価と文の意味." *月刊言語*, 23 (10), 115-118.
- Nilsen, D.L.F. (1972). *Toward a semantic specification of deep case*. *Janua Linguarum, Series Minor*, 152. Mouton, The Hague.
- Shibatani, M. (1995). "Applicatives and benefactives: a cognitive account." *Grammatical constructions: their form and meaning*. Oxford University Press, Oxford.
- Talmy, L. (1976). "Semantic causative types." Shibatani, M., (ed.) *Syntax and semantics*, vol. 6, *The grammar of causative constructions*. Academic Press, New York, 43-116.
- Talmy, L. (1985). "Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms." Shopen, T., (ed.) *Language typology and syntactic description*, vol. 3, *Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge University Press, Cambridge, 57-149.
- 山梨正明 (1994). "日常言語の認知格モデル." *月刊言語*, 23 (1-12).